第二章　衣食住の移り変わり

衣食住は人の生活の上で重要な役割を示すものであり、藩政時代は質素倹約を強いられたり、特別な生活制限を受けたりした。そのために生活文化の変化は見られなかったが、明治の文明開化を境に洋風が取り入れられ、更に終戦後の変化と流行のために、生活様式全般が急変した。

一　衣生活

1　衣　服

衣服は晴れ着、ふだん着、労働着に区分される。晴れ着は「ヨソイキ」、「イッチョウライ」などといい、儀式などに着る着物だが、自給自足の長かった時代には木綿が普通であった。各家庭には足踏みの織機が備え付けてあって、農家の婦人は一四、五歳から綿で糸を引き、それをかせにして紺屋で染色して、地機で織った手織木綿をだれも愛用した。

地機で織った着物

この木綿が出現するまでは麻やコウゾ、フジなどの茎皮繊維をとり、それを細かくさいて糸につむぎ、機にかけて織っていた。着物にするにはたいへんな労力がかかり、ごわごわして肌ざわりも悪かった。その点、木綿は肌ざわりもやわらかく、あたたかで、しかも染めが容易であるため、一般に愛用されるようになった。

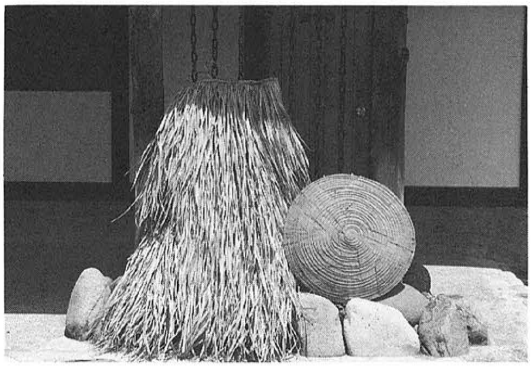
久万町にも明治三九年ごろより紡績会社ができ、糸もいろいろなものができはじめた。なお織物会社が変わった反物を市販し始め衣類の様相も変わってきた。

大正三年、第一次世界大戦が始まったころより、捺染衣類が出回り、値段が安いため流行した。

京都の西陣織とか、秩父織・大島かすりなど、絹織物もこのころ盛んに販売され、松山市にも大呉服店が町ごとにできた。この戦争で日本にも好景気が訪れ、衣食住もぜいたくになって捺染のような安物で満足せず、高級な織物に人気が集まった。

晴れ着は、正月・盆・祭礼などに当たって新調するのがならわしであった。新しい着物の着初めには、氏神様に参るとか、そで通しをするとかした。ふだん着は晴れ着の古くなったのをおろし、更に労働着に更生した。

男子の労働者は上衣は筒そで、下は「モモヒキ」であった。冬の防寒用には綿入れの「デンチ」を着る。女子の労働着も木綿の着流しに、腰巻きをつけ、裾からげに前垂れをした。たもとや平そでの場合は、たすきを掛けて、そでを引きあげ、手には手おい、あるいは腕抜きをあてた。モンペ・ズボン姿に変わったのは、太平洋戦争中からである。婦人の仕事姿のエプロンがけは、たすきと前垂れの兼用姿である。なお、男女とも洋服が普及したのも戦争中からであった。



みのかさ（タクロバチ）

昭和一二、三年ごろまで和服の時代が続いたが、支那事変のぼっ発により軍の指導で青年学校が軍服に似た制服を着用し始めた。これが順次労働着にもひろまり、一般にも活動的なため、普及していった。戦時中はこの服装にゲートル姿でないと非国民といわれた。昭和二〇年八月の終戦とともに、一時は軍放出物資として軍服が出回ったけれども、衣類が豊富になるとともに、洋服が流行し始め今では洋服化したといえる。が、最近は若い女の人の和服がブームを呼び成人式（一月一五日）などに華やかすぎて問題とされるようにさえなった。

農作業などのかぶり物には手ぬぐいが最もよく利用された。男子はほおかぶり、はちまき、女子はねえさんかぶりにする。また笠も用いられた。戦争中は、竹皮を集めて「タクロバチ」（タコロバチ）の作り方の講習も、各地で行われた。今は、きょうぎ帽や麦わら帽子になっている。雨天には、みの笠をつけたが、今はかっぱの着用が多く、上下式でカスリ模様でフード（帽子）つきのものもある。

2　はきもの

はきものについては、ぞうり（草履）を普段は用いた。遠出や農作業にはわらじ（草鞋）をはいた。また雪道には凍傷を防ぐため、わら長ぐつを作り使用した。

げた

すべて自家製で、材料も、ヒノキ・スギ・松などに、わら・しゅろの鼻緒をすげてはいていた。明治二八年日清戦争後に鼻緒（はなお）製造業者が現れ、布製の鼻緒が店頭に出始めた。それまで自家製造であったげたも、そのころから業者で作るようになった。

明治三九年、日露戦争後急速にげた類に変革が起き、さしはまげた、向こう皮つき、ひよりげたなどが流行し始めた。大きな白鼻緒に大きなさしはまげたをはいて、大道を闊（かっ）歩する青年の姿もみられるようになり、それが、昭和一〇年ごろまで大流行した。

ぞうり

雨のふらぬ日は、ぞうりであった。夜なべにわらをうって、各自で製造し、鼻緒の部分には古い布を引きさいて、巻きつけているのもあった。その後、麻裏ぞうり、せったといわれる高級品も出回った。

わらじ

わらじは、大昔から伝承され、大正の初めごろ地下足袋ができるまで、旅をするにも、山仕事をするにも、使用された。今でもときどき見かけるがおおかた姿を消した。

たび

もめんたびは、大昔よりあったらしい。明治三七年ごろまでは、ひもつきであったが、日露戦争が終わった後、現在のようなコハゼつきに改良された。普段は三つコハゼのたびを使用し、訪問着のときは四つコハ

ゼのたびを着けるのが慣習になっていた。

皮及びゴム製くつ

皮製くつは、文明開化で外国との交易が始まってから日本にはいってきたものである。官公吏が洋服になり、軍隊が増強され始めてから順次普及され現在のようになった。ゴムぐつは昭和初期より入り始めた。最初は全くのゴムだけで、くつ下でもはいていないかぎりくつずれをしていたが、その後、上は布製、底はゴムという現在のようなズックぐつが出るようになった。

わらぐつ

昔は、かなりの大雪があった。冬の間仕事ができないので猟に出かけるが、道幅も狭く、道も急な上にわらじでは雪やけ、凍傷にかかるため、考え出されたのが、わらで作った長ぐつである。しかし、かなりの技術を要するため、これが作れるものは組内でも、二、三人しかいなかった。

また簡単なものに、ねじかけといって、わらじの先に指先をおおうものをわらで作ってつけたりしたが、これでも結構保温ができたという。

雨　具

農民や労働者は、雨具としてみのや笠を用いて雨の中で働いていた。しかし、ふだん外出のときは油紙で作った雨傘をさして、高げたをはいた。支那事変の始まったころより、油類の不足が目立ち、代用品を使うようになり、洋傘が見られるようになった。太平洋戦争後洋傘の利用者がふえ、雨傘の売れ行きが悪くなり、製造業者もぼつぼつ姿を消した。また、労働用雨具もビニール製の雨がっぱが普及し、みのや笠は全然見られなくなった。

二　食生活

1　たべもの

農家の食生活は質素そのものであった。主食は米麦半々が上食で、まずしい家では、米三、麦七の割合か、四分六であった。また、トウキビの挽き割りに、米を入れたものも常食としていた。だいたい冬はトウキビ、夏は麦（丸麦）であり、それ以外にも、かゆ、雑炊などもたべた。米は非常に貴重なものであったから、やたらに米のめしはたべなかった。年に数えるほどしかない「紋日」だけに米のめしを食べた。この「紋日」には、餅・団子・すし・ごもくめしなどをよくつくった。このため、「紋日」をおとなも子供も楽しみに待っていた。

大正七年に米価が暴騰し、各地で米騒動が起こった。

その年の一一月に第一次世界大戦が休戦になると、次第に白米食が多くなり、ぜいたくになっていった。

これは支那事変、太平洋戦争の初めごろまでは続いたが、軍の命令によって白米食が禁じられ、粉食、雑穀混入、野菜その他の代用食を摂るようになった。戦後も二年余りは配給制度による代用食をしいられ、また、外米の配給を受け、ネバリのないボソボソした米をよくたべ、白米食など思いもよらなかった。しかし、昭和二八年ごろからようやく米食が意のままになり始め、今日では雑穀混入をしている家庭は少ない。

「もち」についても、農家の生活の知恵が出ているように思われる。

正　月　　お年玉（かさねもち）

三　月　　節　供（ひしもち）

三　月　　彼　　岸（ぼたもち）
五　月　　節　　供（かしわもち）
九　月　　彼　　岸（おはぎ）

副食物は、「おかず」「おさい」といって、主として野菜である。魚や肉などは日常食うことはなかった。それでも、祭り、節季、正月には「無塩（ぶえん）」と称する生ざかなをたべていた。

牛肉はたべないものとしていた時代もあったが、年二、三回たべるのはよいほうであった。

野菜は、ダイコン・カブ・タカナ・ゴボウ・ニンジン・ネギ・サトイモ・ウリ・カボチャ・ナスなどである。ワラビ・ゼンマイ・フキなど山に自然に生えるものをつみ取り、ゆでて乾して保存し、年中必要に応じて食べたもので、平野部では想像もできない山の幸であった。また、ウド・タラの芽も重宝がられる副食物であった。

馬鈴しょが、当地に移入されたのは、明治三九年か四〇年ごろであった。それまでは支那いもという馬鈴しょの一種があったが、粒が小さく、野良生え程度のもので今の馬鈴しょとは比較にならないものであった。今日では馬鈴しょは副食物中の主要な位置を占めるほどに栽培され、各家庭の必需品に数えられている。

このように野菜類が主であって、魚類は川魚を捕獲してたべることはあっても、海の魚は、干魚、塩づけ魚など年二、三回たべるのが普通家庭で、年中たべられない人の方が多かった。

しかし、明治三九年、日露戦争後、我が国が世界の一等国に列したというので、にわかに活気づき、まず体格の向上、教育の振興が強く叫ばれるようになって、自然に魚や肉などが普及し、久万町にも鮮魚店ができた。三津の朝市で仕入れ、人夫の肩で運んで、昼前には、町内を売り歩くという盛況を示した。したがって、各家庭でも鮮魚がふだんの食膳に上るようになった。

この購買力ができたのも、戦勝後、海外貿易の異常な進展をみて、木材、薪炭類の値上がり、道路網の拡大などによる収入増加が原因したのである。特に昭和九年ごろ、貨物自動車による鮮魚の運搬が始まって、いっそう鮮魚の量が増し、価格も安くなったので、ますます需要者はふえていった。

昭和二〇年ごろの大戦終了前後は、極度の物資不足にたたられ、再び野菜万能におちいったが、数年にして景気も立ち直り、主食につれ副食物も豊富になった。昭和四〇年に入っては、鮮魚・カマボコ・鯨・豚肉・鶏肉や各種缶詰類が商店街の五割以上におよぶ商品として仕入れられ、それが売れ行き好調というのだから、実にぜいたくな副食物化というべきであろう。

また、調味料としては、みそ・しょうゆを、農家・非農家を問わず、自家で製造したものだった。

松山市内には、二、三のみそ、しょうゆ製造業者があった。久万にも、明治三六年ごろには、製造業者ができた。しかし、大部分の家庭が自家製造にたよっていた。昭和の初めごろからは、自家製造をやめる者も出て、いつしか商品を購入するようになった。

その後、県内はもちろん、県外からの優秀な商品が店頭に並び販売されるようにまで発展したので、今では自家用しょうゆを製造する者はほ

とんどいなくなった。

2　炊事道具

茶釜及び羽釜

これは、遠い昔からあったらしく、各地で富裕な家庭で使用されていた。（鉄を主としたもの）

茶　罐

主として銅製で、これも茶釜と同じく、上流の家庭にあった。（銅に金を混ぜたものもあった）

鍋

鉄の鋳物で、大小いろいろあったが、土焼きものもあり、明治四二、三年ころまでは、土釜を使用していた。

茶　沸　し

明治四四年ごろまでは主として土製で、破損すると、木灰を塗りつけ修理して使用した。大正元年ごろよりほうろう引きにしたもの、または鉄の鋳物製が出始め、昭和五、六年ごろよりアルミ製・真鍮製などとなり、その後、各種金属製のものが出た。

茶　わ　ん

現在使われているもので、もっぱら砥部焼き陶器である。

おかずわん

主として木製で、何も塗ってなく、「ロクロ」で削りっぱなしの大きなものを使っていた。お客用として、輪島（石川県）や桜井（今治市）あたりから買った物を使用するものもあったが、それも一部で一、二戸にすぎぬありさまであった。茶わん、おかずわんとも、大正初年ごろより順次、体裁も改善されたものが流行し始めた。

箸

竹製で、たかきびの実を煮だした汁につけて、赤く着色したものを使用した。それに輪島物什器に漆塗りの木製はしをお客用に使用する家もあった。

自在さん

天井からなわをつり下げ、竹筒に梅の木で作ったかぎを通し、それになべ・羽釜・どびんなどをかけて、火をたき、いっさいの煮物を作った。このつりなわには、ばい煙が付着し、それに下で火をたくため不断にたき火の粉がつき、なわを焼き切って、なべ・釜などをいろりに落として割ったり、付近にいる者がやけどをしたりすることもあった。また時には火事が起きる場合もあって、極めて不便であったが、大昔から、明治四〇年ごろまでは、農家の九九%が、これを用いた。大正年間にこの自在かぎが鉄製となり、昭和初年ごろには、竹製は、一〇%もないぐらいに激減した。今日ではいろりさえなくなった。

自在さんといろり

杓　子

ヒノキ・スギ・ホウの木などを使った自家製が多く、お玉杓

子も「ロクロ」で中を削り作ったものであったが、日露戦争後に金属製のものがボツボツ出始めた。貝がら杓子もあった。

桶　類

水桶にはすぎ材を使い、輪で締めて、水漏れのせぬように作り、毎年一回定期的に輪替えをしていた。このため、各地域ごとに、桶屋が一、二名いて、じゆうぶんな生活をしていた。昭和三八年ごろまでは桶屋が各家庭を回り修繕をしていたが、今日では、全然姿を見せなくなった。桶類も特殊なものを除いて、昭和三九年ごろより、金属またはビニールの容器に変わり、価格も安く取扱いも便利なものへと変わっていった。

弁当入れ

藩政以前の弁当入れは竹皮であった。竹皮ににぎり飯を包んで持って行くといった簡単な方法が、長く続いた。

弁当入れ

藩政の終わりごろから「めんつ」が用いられた。「めんつ」というのは、大きな竹の表皮を除き内身をけずって火や湯であたため一枚の板のように伸ばし、さらにそれをあたためて丸め、薄い桐の板を底につけて作ったものである。中身とふたと全く同じ形のものを作り、それを合わせて用いた。大きなものには一升（一・八リットル）飯を入れることができるほどであり、大きい「めんつ」を飯入れとして使用し、小さなのを「さいめんつ」といっておかず入れに使った。

また、このころから、夏は弁当が腐敗しやすいので、それを防ぐため、風通しのよい「柳ごうり」を使用するようになった。

昭和の初めごろになって、アルミニウムの弁当箱ができた。しかし、これはあまり小さかったのでもっぱら学童用として使用されていた。

第二次世界大戦が始まったころから、飯ごうなども使われるようになった。このころから、「めんつ」や「柳ごうり」を入れて持ち運ぶ「弁当ほご」などが次第に姿を消していき、アルマイトの弁当箱が普及しはじめた。が、戦争のため物資が不足し、木で作った弁当箱や「めんつ」がまた使用されるようになった。

昭和二八、九年ごろより物資が豊富になり、アルマイトやプラスチックの弁当箱が普及したため、「めんつ」や「柳ごうり」は完全に姿を消した。

三　住　生　活

久万町には山林が約一万四〇〇〇㌶あまりあるが、その八割は草生地であった。化学肥料のなかった明治四〇年ごろまでは、田畑の肥料は山野の草を刈り、これを肥料としていた。また、各家庭の屋根は山の「萱」を用いていた。民家はもちろん、神社・仏閣もことごとく、萱ぶきであった。

久万町の商店街には、かわらぶきもあったが、萱ぶきの家が多く散在

していた。

家を新築するのには、まず鬼門といって、北東にあたる方角を入口にすることをさけた。水利・雪害・風水害の時などを考えて条件のよい場所を選んだ。

翌年家を建てる予定地は、節分の前に屋敷を造って、シメ縄を張り、神官のお祓いを受け、この敷地を出雲屋敷（神様の土地）としておき、分家を建てた。

便所や風呂場は家の外に建てた。これは便所の臭気や、風呂の火の用心からであろう。しかし、風呂はなかなか建てられず、近所でもらい風呂をしていた家が多かった。

萱ぶきの家の修繕は組じゅうの人がこれに当たった。萱刈り、負い出し、ふき替えと、三日間くらいは勤労奉仕をした。このふき替え手伝いには、縄を組内では二房（一房は五〇尋。おとなの両手をいっぱいにのばして、この大きさを一尋とした）組外では二五尋（半房）を持って行くことになっていた。

明治一二、三年ごろまで、かや場や草生地が多かったが、しだいに植林も盛んになり、はげ山、草生地にはヒノキ・スギの苗木を植えた。明治二五年に四国新道のできるまでは、車道はなく、交通が不便で、林産物の販路も開けず、山林には巨木が多く、家屋を建てる材は極めて豊富であったため、家屋は大型なものが多かった。これは、家族数ともにらみ合わせてのことであろうが、平均四間に七間くらいとみてよい。柱も五寸五分角、それに尺から尺一寸角のケヤキの大黒柱を用いてある。

このように、萱ぶき屋根にあら削りの堅ろうな不体裁な家で長い間しんぼうした民家も、しだいに屋根を萱からかわらに替えていった。

第二次大戦後は、特に通風や採光を考えた軽便な家が建てられるようになった。この軽便な家屋は、管理が容易であり、保健にもよく、しかも、経済的負担も少ないということで、この時代に最も適していたものであった。経済生活が安定するにしたがって、昭和三〇年ごろから急激に改造や新築するものが多くなり、昭和四〇年ごろになると農村の住宅も文化的になってきた。一般でも耐火構造の家屋が目立ちはじめた。建築材料も安く、丈夫で、体裁のよいものとなり、豪華なものも建てられるようになってきた。しかし、住宅不足は深刻で政府は昭和四一年度より五か年計画で、一世帯一住宅を目標に建設をすすめているが、本町でも町営住宅への入居は希望者の半数を満たしているにすぎなかった。昭和五〇年から六〇年初めにかけて明神・畑野川・直瀬・父二峰に「3DK」の町営住宅が次々と建てられ、住宅事情は著しく改善された。

萱葺きの家